

---

**Knigh t o f N i g h t 聖なる騎士の物語**

豆腐@顎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Knight of Night 聖なる騎士の物語

### 【コード】

N0497W

### 【作者名】

豆腐@顎

### 【あらすじ】

幻想都市、ゼノリアル。

その街に住む勝道 雄志はどこにでもいる平凡な高校二年生。

誰もが過ごす日常、どこにでもある日常。彼はいつまでもそんな中にいられると思っていた。

深夜、二時三十分。彼は目を覚ます。

そんな些細なことだったが、彼の日常は、確実に壊れていた・・・

## 序章

夜、それは闇。そして、闇は静寂を呼ぶ。

静寂とかすかな町明かりだけがある、午前三時。

そんな闇に包まれた幻想都市ゼノリアルの片隅に、この時間帯には不釣り合いな者がいた。

白いブレザーに身を包み、道路の真ん中で佇んでいる。

十五、六の青年であった。

「・・・さて、そろそろかな？」

ブレザーの内ポケットにしまい込んでいた携帯で、時刻を確認する。現在、三時五分。

彼は時刻だけを確認して、携帯を内ポケットにしまう。

すると、

ザ・・ザザザ・・・

耳にノイズが走る。集中しないと聞こえないほどの、微かな音。

だが、発信源がどこにあるのかは、何となくわかる。

「ジャストポイントだな。さっさと終わらすか・・・あんまり使っちゃこの体が可愛そうだ」

彼は発信源の方を向く。《何となく》の曖昧な感覚だが、どの辺りにいるのか、どれくらい離れているのか、それだけははっきりとわかる。

しばらく音の発信源を見ていると、赤い球体が姿を現す。

そして、瞬く間に、周囲の闇を吸い、一つの形となる。

「せっかくのんびりしてやったんだ。少しは楽しませてくれよ？来い、カリバーン」

右腕を真横に伸ばす。その動作に合わせるかのように、大きな何かが降ってくる。

それは、青年の背丈と同じくらいの大剣であった。

飾り気の無い白い刀身。その白い刀身から伸びる、もう一本の柄。

しかし、刀身には刃が付けられておらず、剣というよりは、鈍器に近かった。

そして、最も目を引き付けられるのは、刀身の根元、鏢に当たる部位である。

そこには、？眼？のようなものがあつた。直径三十センチほどの眼。薄く緑色に輝く眼。

彼は大剣の柄を握る。

それは少しだけ眼の光を強くしてこたえる。

「さてと・・・行くか！」

青年は闇に向かって走る・・・

午前七時三十分。

目覚まし時計が鳴り出す。

ベッドから手を伸ばし、手探りでその音源を探る。

電子音ではなく金属音なので、かなり耳に響く。

「う、うるさいなあ・・・もう少し寝かせてくれないじゃん」

自分でセットしておいて、目覚まし時計に文句を言う。

ようやく音源の時計の音を止める。

「うう・・・なんだかとも、眠い」

そうは言いつつも、このまま二度寝してしまつては遅刻してしまうので、しぶしぶ彼はベッドから這い出る。

彼の自室は二階にあつたので、寝巻きのまま、机の上に置いてあつた携帯と登校用の鞆を手に、リビングへと降りる。

携帯と鞆を机の下に置き、トースターにパンを入れ、冷蔵庫からイチゴジャムを取り出し、それをテーブルの上に置いて、洗面台へと移動する。

顔を洗い、うがいをしてから、リビングに戻り、パンが焼けるのを待つ。

待っている間はニュースを見る。最近は何の変死や通り魔事件が多いようだ。

「ま、どうせ関係ないよな」

パンが脱力感のある音と共に上に飛び出す。

それを取り出し、ジャムを塗って食べる。

食べ終わってから歯を磨き、寝癖を整えてから、三度リビングに戻る。リビングの服掛けから制服を取り、それに着替える。

テレビを消し、電気を切って、家を出る。

玄関から出ると、朝日が目に刺さる。

「今日も、いい天気だな」

太陽の日差しに、少し目を細めながら、そんなことを言う。

日常、こんな日常に、彼、勝道 雄志は生きている。

いつものように、学校に行って、授業を受けて、そして家に帰る。

そんな日常。

「なんか面白いことでもないかねえ？」

誰もが過ごす日常だからこそ、それに飽きてしまう。どこにでもいる高校二年生。

彼は自宅の隣の家の前で、立ち止まる。

現在七時五十五分。

「そろそろ、かな？」

携帯で時刻を確認して、それをポケットにしまう。

すると、

「じゃ、お母さん、行ってくるね！」

と、家の中からもいつも聞く声が聞こえてくる。

そして勢いよく玄関を開け、飛び出してくる。

「あ、ユウジ！おはよっ！」

「ああ、おはよーさん」

彼女は、月森 真美。彼の幼馴染である。

まんまるの大きな栗色の瞳と、右側サイドテールがチャームポイントの元気で明るい女の子である。

「いい天気だし、今日も楽しい一日になりそうだね！」

右手で光を遮りながら、空を仰ぐ。

「そうか？今日は授業に俺の大キライな数学があるからな。糞みたいな日になるだろうよ」

「それじゃ、週三日は糞みたいな日になっちゃうよ？」

「いいんだよ。みんなが生きてる日常だ。つまらなくて当然」

そういつて、歩みを進める。いつもの日常、学校へと。

「くう・・・眠い・・・」

現在午後三時二十五分。学校の授業がすべて終わり、クラス中の人間が急いで帰宅の準備をする時間帯。

もちろん、眠いとぼやいた彼も同じようにクラスの風景の一部として、帰宅の準備をする。

「よし、終礼すんぞ〜」

担任が教室に入ってきた。そのころには殆どの人間は帰宅の準備が終わり、鞆を机の上に置き、いつでも帰れるように支度をしていた。

「ま、連絡事項は特に無いな。今日の掃除は二班と四班だな。じゃ、解散」

と、担任が手をたたくと、全員一斉に立ち上がる。

「礼」

クラスの委員長に続き、全員で頭を下げる。

その後一斉に机を下げ、掃除当番以外はみんな一目散に教室から出る。

彼も人の波に流され、教室を出る。

「今日も、しょぼい一日だったな」

今度は流されないように、廊下の端へ寄る。

数秒もすれば、人の波は治まる。誰もが帰宅、または部活動に勤んでいるので、いちいち立ち止まる人は少ない。

なので、独り言を言っても、誰も振り向くことは無い。

「もう、あんまり否定的な言葉は言うもんじゃないよ？」

ただ一人、月森真美を除いて。

「うつせえなあ。いつからそこにいたんだよ？」

「さつきから、かな？」

その応えに、彼はまったく・・・と呆れつつ、

「まあいいか、さっさと帰るぞ」

返事を待たずに廊下を歩く。

「あ、ちよつと待ってよ」

そうして彼女もついてくる。

「ねえ、ユウジはさ、将来のこと考えてる？」

学校からの帰り道、真美はそう言った。

「将来？」

「そ、夢とか、やりたいこと」

俺たちも高校二年になり、もうすぐ夏休みに入る時期。そろそろ進路のことを考えてもいい時期だろう。

「そうだなあ・・・今まで適当に、流されるままに生きてきたし、別に考えて無くても大丈夫じゃね？」

特にやりたいことや、興味があることがあるわけでもないのだから考えろと言われても、かなり困る。

「もう、ダメだよ？ちゃんとやりたいこと見つけなきゃ。人間はね、目標が高ければ高いほど、大きな力を発揮できるんだよ？」

「へいへいそうですね」

とりあえず適当に流す。

「ちゃんと聴いてる？ユウジ成績はいいんだから、ちゃんと将来のこと考えなきゃ」

なぜ成績がいいからと言って将来のことを考えなきゃならんのだ？

「べつにいいだろ？俺は今生きるので精一杯なんだよ」

「家で寝てばかりいるくせに。どうせなら騎士にでもなったら？」

「はあ？何が騎士だよ。バカバカしい」

俺たちの住む街、幻想都市ゼノリアル。数百年前までトーキョーと呼ばれていた街は、世界一の技術を生み出した。

それが、イマジニアリティと呼ばれるもの。

詳しいことは良くわからない。今も根強く残っている携帯と同じで、便利なものは『便利なもの』としか見ない。仕組みなど理解しているものは少ないだろう。

とにかく、イマジンリアリティというのは便利なもので、自分のイメージしたものを具現化するものなのである。

しかし、その便利なイマジンリアリティにも欠点があるらしい。それは、イマジンリアリティを行使する際、膨大なエネルギーが街の至る所に設置されている幻炉を通じて送られてくるらしいが、深夜帯になるとその幻炉が暴走してしまうらしい。

その暴走を止めるのが、騎士の仕事。

「大体なあ、こりや噂だぞ？今ネットで噂になってるからって簡単に流行に流されてたら、デジタルデバイス真っ盛りの世の中についていけないぞ」

「そんな、真剣にユウジのこと考えてあげてるのに……」  
確かに、焦りはある。これから俺はどうなるのか、このままでもいいのか、そしてなにより、俺がやりたいことは、何なのか？  
でも、焦りよりも、なぜか自信のほぅが大きかった。

根拠なんて無い。それでも、自信があった。今まで流されるままに生きてきたんだから、そのうち《流れ》がやってくるだろう。それに乗れば、今まで通り、きつとうまくいく。そんな自信。

「大丈夫だって。心配してくれんのはありがたいけどさ。ホントに心配しなくていいから」

そういつて、真美の頭を撫でてやる。こうすれば、こいつは少し恥ずかしくなって、しばらく黙る。困ったときの俺専用の対処法である。

「もう……それでも、心配なんだよう……」  
声が弱々しい。

「ま、だろうな」

そこで会話が切れる。

俺たちはそのまま、一言も喋らずに、自宅に帰った。

午前零時。街が静かになってくる時間帯。

雄志はパソコンを立ち上げ、ネットサーフィンをしていた。一つのページを斜め読みしては、少しでも興味の沸いたページへ飛ぶ。

話題のアイドル、ホラー、事件、ゲーム・・・

かれこれ二時間はディスプレイを見つめていた。

「ぬう・・・さすがに目が疲れた・・・次のページのぞいたら寝よう」

スレッドのリンクを眺める。

その中の一つに、昼間話していた《騎士》の話題が上がっていた。

「・・・馬鹿か？こいつら、夢見すぎだろ」

おそらくこの話題に反応しているのは、彼と同じく日常に退屈している人間だろう。

「この日常が、どれだけありがたいか・・・」

彼は一度、非日常を経験している。

母を目の前で殺され、父はどこかに消えた。

今でも鮮明によみがえるあの光景。

「・・・クソッ」

頭を振り、切り替える。

携帯を手に取り、キーを操作する。

起動させたのは、イマジナリアリテイ。自らのイメージを具現化させる、魔法のような『便利なもの』。

具現化させたのは、家政婦。

「ご用件を」

留守電のときに出てくる女性のような声で、命令を求める。

「お茶を入れてきてくれ」

「かしこまりました」

一礼して、部屋から出て行く。

「コレが暴走でもすんのか？」

とてもそうは思えなかった。ただの迷信としか思えない。

約二分後に、お茶を持って来てくれた。

一気に飲み干し、コップを直しに行かせる。

「・・・ただの、噂だよな」

そう自分に言い聞かせ、ページを開く。

案の定、根も葉もない噂ばかりだった。

馬鹿でかい怪物と戦ってた。金髪ツインテール美少女だった。武器が巨大であった。等々。

「おいおい・・・お前ら落ち着けよ。現実はそんなに甘いモンじゃねえだろ」

誰かに伝わるわけでもないのに、ついつい呟いてしまう。

「何を警戒してたんだか。アホらし・・・」

そういつて、椅子から立ち上がり、パソコンをシャットダウンする。

「退屈で何も起こらないのは、平和である証なんだよ」

それだけ言つて、部屋の電気を消した。

午前二時三十分、勝道 雄志は目を覚ました。

特別何かがあつたわけでもないが、目が冴えて眠れない。

「明日、ガツコあるのに・・・」

仕方ない。と呟いて、部屋から出て一階に下り、お茶を入れる。

リビングの庭側の窓から、月明かりが差し込む。街中だと言うのに、いやに月明かりがまぶしく思える。

「月でも、見るか・・・」

特にやることも無いので、庭に出てみる。

他の家の電気は、ついていない。当然であろう。殆どの人間はこの時間帯は寝ている。起きている人間と言えば、徹夜で勉強する者、夜の営みをする者、特に何もしない者・・・

「何やってんだか。俺は中二病かつつの」

数秒月を見た後、恥ずかしくなってきた彼は、手に持っている飲み物を一気に飲み干し、リビングに戻る。

グラスをキッチンのシンクに置き、二階に上がろうと階段に向かったその時、インターフォンが鳴った。

「・・・え？」

体に電流が走ったかと思えた。何か変な感覚が体中を駆け巡る。

なぜこのような時間に？なぜこの家に？頭の中で様々な疑問が浮かび上がる。

「マミか？」

人間と言うものは非常事態を非常と認めたくない生き物なのである。ありえないことが起きれば、気のせいに行ったり、見なかったことにしたりするもの。

だから彼も同じように、非常ではあるが、最も起こりうる事態を予想してしまう。

「そんなわけないよな・・・あいつはお利口さんだからすぐ寝ちゃうし」

思考を巡らしているうちに、もう一度アレが鳴る。

「まさか、幽霊？」

とりあえず確認のため、玄関に向かう。ドアホンは不幸にも現在故障中なので、玄関ののぞき穴を確認することにした。

静かに、息を殺して、まるで大昔に実在していたらしい、ニンジャの様に。

いつもならリビングまで五秒とかからない廊下だが、二分ほど掛けて渡った。

のぞこうと思った瞬間、三回目のインターフォンが鳴った。

「!？」

驚倒し、体が凍りついた。足が震え、なかなか前に進めない。

ドアまで後一步だと言うのに、その一步が出ない。

心臓が激動する。胸の中で踊り狂っている。

この先に待つものは何なのか？人か否か。もし人でなかったら？仮に人だとしても、誰が？どう考えても、たどり着くのは、最悪の状況。

インターフォンが鳴る時間帯だけで、こんなにも緊張するものなのか。

「こんなことなら、もっと早くに治してもらうべきだった・・・」自分の耳でも聞き取れないほど、小さな声で呟く。耳から入ってくる音は何も無いはずなのに、ザワザワと五月蠅い。

固まっていると、ドアの向こうの何かに、連続で鳴らされる。汗が止まらない。

「クソ、こつちがビビッてたら調子に乗りやがって」  
だんだん腹が立ってきた。少しだけ緊張が解れたが、まだ恐怖感が勝っている。

だが、彼も男だ。ここまで来て引き下がるわけには行かない。  
まだ痺れが残る足を無理やり動かし、震えて筋肉が軋みを上げていた右腕をあげ、ドアノブに手をかける。

一度深呼吸をし、ドアノブを思い切りひねる。

「こんな時間に誰だコノヤロー！」  
ドアを思い切り開け、叫ぶ。

しかしその一秒後には、彼は腰を抜かしていた。

「こんな時間に誰だコノヤロー！」

俺は、ドアを勢いよくぶち破り、叫んだ。

しかし・・・

「・・・は？」

俺は地面に尻をついた。驚きが約四十パーセント、安堵が五十パーセント、残りは疲れた。

「なによ？いきなり怒鳴りつけてきたかと思ったら、尻餅なんかついちゃって」

そこにいたのは、美少女だった。月明かりを反射して、少しだけ妖しく光る綺麗な金髪のツインテールに、炎を宿したかのような瞳。白く美しい肌。おそらくは、誰もが認める美少女だろう。

そんな風に見とれていると、

「ほら、さつさと立ちなさい。今日もオシゴト、行くわよ」

そう言つて、美少女が手を差し出す。ただそれだけの動作であるはずなのに、かなり上品に感じる。

「え？あ、ありがと」

彼女の手を借り、立ち上がる。もう緊張は無くなつていて、スムーズに立ち上がることが出来た。

地味に背も高いな・・・大体、百六十五センチ位か？

「てか、あなたまだ寝巻きじゃない！？早く着替えなさいよ」

「ええ！？あ、えーと・・・まあ、ちよつと待つてくれ」

そうだ、これから外に出るというのに、無神経にもほどがあるよな。

玄関から移動し、二階にある、自室で携帯を取る。

「ん？なんかおかしくね？俺、別に外に用事ないよな？」

一体さつきまで何を考えていたのやら。いきなり家に押しつけてきたのも、こんな時間に我が家のインターフォンを鳴らしまくつたのも向こうであり、無神経なのはあちらではないだろうか？

「・・・バカか俺はああああああああ！！！！？」

頭を抱え思い切り叫んでいた。相手はこんな時間に押しかけてくる奴だぞ！？てかオシゴトつてなに！？まさか風俗紛い！？だとしたら俺お金なんて持つてないぞ！？でも、あんな綺麗な子と『いい事』できるなら高い金払つても・・・って何を考えてるんだバカか！？そうじゃないだろ！？いくら美少女だからってやっていいことと悪いことがあるだろ！落ち着け！落ち着け俺！素数を数えるんだ！

「1・2・3・・・」

そして深呼吸。

「ふう〜」

数秒目を瞑る。

自ら視界を絶ち、集中し、落ち着いて呼吸を整える。

「とりあえず、あいつから俺への敵意があるわけじゃないはずだ。

それに、話が分からない奴でもなさそうだな」

いきなり怒鳴りつけても怒らず、尻餅をついていた俺に手を差し伸

べてくれたことから考えれば、それは明確だろう。

まさか人違い？それもないはず。向こうは俺と面識があるような素振りだった。

「わからない・・・どう考えてもわからない」

俺が生き残れる道は二つ。このまま彼女について行き、オシゴトとやらを完遂すること、そしてもう一つは、もうめんどくさいからあきらめて寝ること。

「後者だな。断然後者だ」

なんだか疲れてきて、また眠くなってきた。これはきつと夢だったんだ。そう、夢なんだよ。

「だって、俺の家にあんな綺麗な子が来る筈ないもん」

それだけ言って、俺は暖かい布団にダイブした。

それから、五分もせずに、彼は再び目を覚ました。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼は何も言わずに、携帯を探し、時刻を確認する。

現在午前二時四十三分。

「くう・・・よく寝た・・・」

伸びをして、携帯のイマジニアリティを起動する。すると彼の着ていた寝巻きは、たちまちどこかの高校の制服に変わった。

「しかしまあ、なんとも便利な世の中だなあ」

そんなことをつぶやきながら、彼は自室の窓を開け、そこから飛び降りた。

窓の真下は玄関口なので、着地点には先ほどの美少女がいた。

「おはようさん。今日もよく寝れたわ」

彼女に向かって、軽く手を上げる。

そのあいさつを彼女は不審に思ったのか、

「あら？さつき玄関から出てきたばかりじゃないの。まさかバグでも起こした？」

「はあ？何言ってるわけ？俺はさつき目覚めたばかりだぜ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人して沈黙。

しばらく黙っていた二人に、燕尾服を着込んだ白髪の老人が、話しかける。

「コトナ様。お時間です」

コトナと呼ばれた彼女は、そういえば、とつぶやき、老人に応答する。

「そうね、じゃ、行きましょうか」

そうして、彼と彼女は、家の塀の外に停めてあったリムジンに乗り込む。

「タナカさん、今日のターゲットはどこに？」

彼女はリムジンに乗り込むなり、運転席に座っている老人に問う。老人は、

「座標はBの8でございます」

と答える。

「ここのとこ毎日だけど、位置が複数じゃないのが救いね」

彼女はポケットからタブレット型端末を取り出し、指でタッチし、地図で座標の位置を確認する。

「今日も楽そうだな・・・」

「油断しちゃダメよ？幻炉のエネルギーは無限に近いのだから。それにまだ相手のランクさえ分かってないわ」

「へえへえ、肝に銘じておきますよつと。てかさ、最近目覚めるのが遅くなってる気がするんだよなあ。お前なんか知ってる？」

それに、彼女は一瞬だけ体を強張らせる

「ここは知らないと言いたいけど、気のせいなんかじゃないわ。あなたは確実に目覚める時間が遅くなってる」

「ということは、始まってるんだな？覚醒が」

彼は少し悲しそうな、すこしだけ期待しているような、なんともいえない表情を見せる。

「そうね。覚醒なんて、万に一つって聞いたけど、一番扱いやすい

性格のあなたが消えるなんてね、少し残念だわ」

「おいおい、こんな時くらい素直に、消えてしまっなんて淋しいわ、抱いて！とか言ってくれよ」

「今のが素直な気持ちよ。主人格は一度見たただけだけど、あんまり使えそうな子じゃないのよね・・・主人格には悪いけど」

「おいおい。でもさ、俺より力が引き出せるんだろ？だつたら大丈夫なんじゃねえの？なににせよ、俺が出てこなくなつたときは、こいつの事頼むぜ」

彼は自らの胸を親指で指す。

「自分が消えるって言うのに、こんな時まで主人格を優先するのね。あなたは」

呆れたように、彼女は言う。

「そういう風になつてるんだろ？ま、今夜が最後と思つて、気合入れるか」

彼は頬を両手で叩いた。

「さてと、今日もサクッとやっちゃいますか！」

リムジンから降り、勝道 雄志は伸びをしながら言う。

「最後になるかもしれないのに、もったいぶる気は無いのね。そこは感心するわ」

続けてコトネも降りる。

「市民の命が懸かつてますからナ」

彼は腕を両腰の後ろに回し、わざとらしく言う。

「はいはい、何時如何なるときでも態度を変えずにふざけるのもあなたの良い所ね」

「ソレは褒めてねえだろ・・・」

そんな彼らの会話に、割って入り込むモノがあった。

ザザ・ザザザザザ・・・ザザザザザザザザ・・・

「やっとなたか」

待つてたぜ。と言いつつ、音源の方を見る。

「今日も、人間の中に潜み、人々の畏怖の神に為ろうとする者を、  
私たちが神の候補が、討つのね」  
彼女は言う。それは何かの呪文のようなものでもあり、口癖のよう  
なものでもあった。

刹那、世界は闇に包まれた。

「聖戦の始まりだ！」

第一章 はじめのその1(前書き)

## 第一章 はじまり その1

無限世界。

そこは、終わりも始まりも、色でさえも無い世界。当然、そこには生きている者も無い。

しかし、そこに当然のように住まう者たちがいる。

「ちゃんと集まってくれたみたいだね。どうやら本当に暇なようだね、神っていう存在は」

「暇なわけではない。この世界は狭く、そして広いからな。どこからでも声は聞こえるし、どこにだって移動できる」

お前ももう知っているだろう？と、どこからともなく声は響く。低く、腹の底に響くような、中年男性のような声。

「でもさあ、ソウシが来るなんて珍しいね。ここには確かに存在するものがある、それは退屈だって言っつて、ソレきりココに来なかったのに……」

今度は、少年の声が出た。

それに、唯一姿を見せている、ソウシと呼ばれた人型が、

「下のほうで面白いことがあってね、僕の所持しているナイトの一人が、シフトしたよ」

「つまり、私たちの観測カラ、抜ケ出シタと？」

今度は女性の声。

「ああ、そうだよ。もう暫くすれば、覚醒するだろう。ジョーカーとして」

神のくせに、予測するなんて、すこし奇妙だね。彼はそう付け加える。

「そういうものだよ。我々は人間たちよりも一つ上の世界に住んでいる。下のものはすべて視ることが出来るが、同じラインに立つと、急に視えなくなる。お前のおきもそうだった」

「そうだね、人からすれば神かもしれないけど、ここにいる僕らは

そんな存在じゃないよね」  
それだけ言って、人型はその世界から消えた。

月森 真美の一日は伸びから始まる。曰く気持ちがりセットして今日も一日元気に行こう！という気分になるらしい。

だから今日の朝も同じようなことをする。

「ん……くう……」

思い切り伸びをして、ベッドから出る。

そして彼女はもう一度伸びをして、部屋を出る。

「父さん母さんおはよ〜」

いつものように笑顔で朝のあいさつをし、朝食が用意されているテーブルのイスに座る。

そしていつものように朝食を食べ、いつものように歯を磨き、いつものように髪を整え、いつものように学校に行く準備をする。

「ここまでいつもどおり……」

携帯で時刻を確認し、そろそろユウジが来る時間だな。と、家から出る。

「じゃ、母さん行ってくるね」

いつものように靴を履き、いつものように母に手を振って、いつものように玄関の扉を開け、外に出る。

「あれ？ユウジまだなのかな……」

もう一度携帯の時刻を確認する。

現在七時五十五分。いつもならこの時間には幼馴染である勝道 雄志は自宅の前で待っているはずなのに。

「むう……どうしよう」

朝のホームルームまであと三十五分ほどある、そして、自宅から学校までは二十五分から三十分ほどかかる。なので、彼を待てる時間は五分ほどしかない。

「一応、メールしとこう」

もう一度携帯を開き、メールを雄志に送る。

先に行つとくネ

「・・・ちよつと恥ずかしい」

彼とはあまりメールをしないので、どんな文章を送ればいいか迷つてしまう。

「ま、いつか」

時間も無いので、メールをそのまま送り、学校へと向かう。

学校についても、雄志は居なかった。彼のクラスにも、廊下にも

「大丈夫かなあ？」

もう一度メールを送ろうとしたとき、チャイムが鳴った。

「うっ・・・タイミング悪いなあ」

そうばやきながら、彼女は教室へ向かった。

少しだけいつもと違う日常。いつもそこにいるはずの人が、少しの時間でも、いない。

なぜかこのことが、彼女は不安で仕方なかった。

午前十一時四十六分。雄志は目を覚ました。

「遅刻つてレベルじゃねーぞおい・・・」

彼はここまで来たら後は同じだと考え、まず昼食をとってから学校に行くことを選択した。

「てゆうか、携帯のアラームちゃんとセットしたはずなのに」

そう言いつつ、携帯を開く。

携帯には、メールが三通届いていた。

「ママか・・・」

三通とも彼の幼馴染、月森 真美のものだった。

午前七時頃のもの、三時限目が始まる前と終わる頃の時間。

「とりあえず返信しとかないとな」

今日は遅刻です。

件名にそれだけ打って、送信ボタンを押す。

「あゝ、なんだったんだらうなあ？夢？もしかして体外離脱つてやつ？」

昨夜のことを思い出す。

「ま、思い出したりして真実がはっきりするわけじゃないんだけどさ」

そう言つて、出来る限り思い出さないようにする。正直、気になつて仕方ないが、考えても仕方が無いので、気にしないように努力する。

「とりあえず、飯だな。その後にガッコいくか」

現在一時二十分。そろそろ五時限目の授業が始まる頃だ。

「しんどいなあ・・・」

正門をくぐり、ため息をつく。遅刻なんてかなり久しぶりだ。

「理由、寝坊とかで許してもらえるかねえ？」

すこし心配だが、気にせず昇降口まで行くことにする。

当然、人はいない。我が高校には、授業中にフケるような輩はいない。

「ま、進学校だもんな」

そうつぶやきながら、靴を履き替え、今度は職員室にむかう。

職員室の前に、遅刻カードがある。そこに遅刻した理由と、今後の意志を書かなければいけない。正直、後者が存在する意味が分からない。

「ま、テキストに書くか」

ボールペンを握り、すらすらと擬態語が出てきそうな勢いで書いていく。

「こんなもんか」

遅刻した理由 大寝坊

今後の意志 目覚ましに期待します

その紙を持って、教室まで上がる。

「おはようございます」

授業中であることも気にせず、普通に教室に入る。

「やっと来たか、何やってたんだ？」

まあとりあえず遅刻カード出せ。と古典を担当しているこの二年三組の担任、坂本が言う。

「いやあ、昨日いろいろありまして」「  
そういいながら、カードを渡す。

「お？ユウジまさか、月森といちゃついていたんじゃないのか!？」  
俺の席の隣に座っていた斉藤が茶々を入れる。

奴がそんなことを言うので、周りがざわついてくる。

まじかよ、盛んだなあやら、俺は信じてたぜとか、ぱねえっす、勝道さんばねえっすなど。

中にはサイテーなどという声もあった。

「ちよ、ふざけんなお前ら！無駄なときに団結すんな!」

俺の制止により、声だけは収まった。

それでも、みんなの視線が痛い。普段はまるでバラバラなクラスであるが、よく変なところで団結してしまう。担任曰く、そこがこのクラスのいいところでもあり、悪いところでもあるらしい。

その静寂をを、担任の坂本が破る。

「ま、元気なのはいいことだ。でも、男ならちゃんと責任取れよ?」

「いやだからそうじゃなくて・・・」

「フー！やるねえ!」「いよっ！大統領!」「それ古すぎんだろ、

お前いつの時代の人間だよ?」

そんな風に、また教室が騒がしくなる。

「もう、どうにでもなれ」

数分もすれば静かになるはずだ。この学校の生徒はだいたいそんな風に出来ている。なぜなら、みんなレールの上を歩いてきた人間だから。指示通りに動き、少し外れてもまたレールの上に戻る。そんな人間たちなのだ。

俺も、そんな人間の一人。自ら動くわけでもなく、ひたすら誰かがさした《最良》の道を選ぶ。

「ま、そんなもんだよな」

俺は暫く続くであろうこの騒がしさの中で、小さくつぶやいた。

放課後、午後三時三十五分

「あゝ、しんど……」

一日の疲れを解き放つように、伸びをする。コレがすばらしく気持ちが良い。

「五時限目から乱入してきたくせに、よく言うな」

と、斉藤が突っ込みを入れる。

「うっせえな、昨日いろいろあったんだよ」

そう反論すると、

「やっぱり月森とやってたんだろ？盛んだのう？」

「ざけやがって……そんなことより、今日の分のノート貸してくれよ。明日ちゃんと返すからさ」

話を遮り、授業の遅れを取り戻すためにノートを強請る。

「しゃゝねえなあ。ほれ」

そう言つて、四時間分のノートが渡される。

「マジサックス。そろそろマミもホームルームが終わった頃だろうし、迎えに行くかな」

「やっぱりアツアツじゃん」

「幼馴染だし、一緒に帰つてやらなかったら後で何言われるかわからんからさ」

それだけ言い残し、教室から出る。

真美のクラスは隣の二組なので、教室で待っていれば、すぐに出てくる。

「あ、ユウジ来てたんだ？」

「メールで送つたろ？今日は遅刻ですって」

「まあ、そうなんだけど、少し心配で」

そして、心のそこから心配してましたといわんばかりの表情を見せる。

「なんか、悪かったな。よし、帰ろうぜ」

とりあえず謝つてから、その場を去ろうとする。みんなの視線が痛

すぎる。

「あ、ちょっとまってよ〜」

それを真美が追いかける。とてとて、と効果音でもついでるんじゃないかと思うくらい可愛らしい歩き方で。

「あゝ、暇だなあ」

帰り道の途中、彼はぼやいた。

「じゃあさ、今日ユウジの家泊まってもいい？」

隣にいた幼馴染が、顔を覗かせながら話しかけてくる。

そういえば今日は金曜日だったな、と思いながら、

「却下」

彼は即行で否定した。

「ええ・・・なんで？」

「そんなの決まってるだろ。俺たちもう高校生だぞ。神様、仏様が許しても、お前んとこの母さんが許さないだろ？」

そう、彼らはもうお年頃の高校生。間違いが起きても不思議ではない、所謂？お年頃？なのだ。

「なら、お母さんが許可してくれたら、今日泊まってもいい？」

と、自信に満ち溢れた顔で、彼に持ちかける。

「ツハ、出来るもんならやってみるよ」

彼は小馬鹿にしたように笑う。

その態度に、彼女は少しだけムキになって、「むう・・・」と言いながら、携帯で電話を掛ける。

彼は空を見上げる。どうせ出来やしないのさと、心の中で彼女に言い聞かせる。

確かに、泊まりにきてくれればいいとも思う。なかなか美少女の幼馴染とドキドキの同棲生活が、擬似的にでも出来ようものなら、少しだけでもこの日常から逸脱できるかもしれない。

そんな風に思っていた矢先、

「え!?!いいの!?!やった!?!」

携帯で話していた月森 真美が、それを耳に当てたまま歓喜の声を上げる。

そしてそのまま、

「じゃ、今日泊まるね!」

「うそだろ・・・」勝道 雄志は思わず呟いた。

「そうと決まれば準備しなきゃ!早く帰ろ!」

真美は雄志の手を引き、走って家に向かう。

手を引かれ、走ったまま、彼は大きく、長く、これ以上ないくらいのため息をついた。

## 第一章 はじまり その2

無限世界。

「確かに、これは観測することが出来ない」

男の声が響く。だが、姿はどこにも無く、映像だけがその空間に存在していた。

その映像には、十六歳の青年が移っている。

何の変哲の無い映像のはずだが、その？何の変哲の無い？ことが、彼らにとつての異常だった。

「それに、すでに確立に干渉しているのか・・・」  
どこか悲しげに、声は響く。

「まあ、望むのはこれ自身か。私達は、ただ見守ることしか出来ないのだからな」

そして、この世界からすべてが消えた。

午後四時二十五分

「わあ、なんだか久しぶりな気がするなあ」

私が一番最後に雄志の家に訪ねたのは、中学三年生の頃だった気がする。

家はお隣さんなのに、雄志は二年もこの家に入れてくれなかった。

何となく理由は分かる。だって、ここは雄志のお母さんが殺され、

お父さんが消えた場所だから。

あの時から、何も変わってないな。

「ほんとに、変わってないね」

別に言おうとしたわけじゃないけど、無意識のうちに言ってしまう。

「は？今なんて？」

「え？ああ、別に何も無いよ？荷物は、どこに置いたらいいかな？」

そう言つて、鞆を少し持ち上げる。そして、小首をかしげる。雑誌に、モテる女の百の動作つてタイトルで、載っていた気がする。

「そうだなあ、着替えとかもあるんだろ？だったらとりあえずリビングにでも置いとけ」

「なんだか素っ気ない返事だなあ。すこしでも、照れてくれてもいいのに。」

「うん、分かった」

そのままリビングに向かい、荷物を置く。

「何しよっか？」

「あゝ、そうだなあ。まだ四時だし、お前がいなきゃ昼寝してたとこなんだけど、どうせこのままでも暇だし、外にでも行くか」

おそらく何気なく言った言葉なのだろうけど、私は凄く不安になった。

一瞬だけ、顔が歪む。でも、笑顔を作り、

「あ！デート？やった！」

手を勢いよく合わせる。音はパン！なんて鳴らしたら可愛らしくないから、出来るだけぼんに近づけるように努力する。これも例の雑誌に載っていた。

「ん？どうでもいいけど、あんまり引っ付きすぎるなよ？中学ん時に見つかってすげえ面倒くさいことになったの覚えてるだろ？」

デートと言う言葉になにか引っかかっているような素振りを見せながら、雄志が釘をさしてくる。

「なんで？いいでしょ？周りの目なんて気にしてたら生きてけないよ？」

不安を一生懸命抑える。せつかく楽しいことをしにいくのに、しみりした空気でいきたくない。

「はあ・・・もういいや、行くか。飯は外で食うから、金は用意しとけ」

「はゝい」

返事をして、おろした鞆から、財布を取り出す。

少しだけ、ドキドキしてきた。雄志とどこかに遊びに行くのも、なんだか久しぶりな気がする。

中学生までは、お互いに余裕があった。だからいつものように遊ぶことが出来た。

でも、高校生になってから、いろいろ忙しくなってきた。でも、遊べる時間が減ったわけじゃない。課題なんかも多いけど、夜に片付けられるレベルだった。

だから、私よりも頭がいい雄志は、私よりもっと余裕があるものだと思ってた。

私より優秀な雄志は、何をするにも私より上だと思ってた。

それは、もしかしたら間違いだっただのかもしれない。人に見えないようなところで、私にさえ見えないようなところで、雄志は努力しているんだと思う。

だから、私の数倍は忙しいはず、なんて思ってた。

「それも、違うんだよね・・・」

思わずつぶやいてしまった。

「は？何が違うんだよ？」

「ユウジはさ、私と居るの、ヤなの？」

言ってしまった。こんなこと言うつもり無かったのに、しんみりな空気は嫌だなんて思っておいて、自分でそんな空気を作ってしまった。

「え？」

そして、沈黙。

「ううん！なんでもない！早くいこ！ユウジとの時間は、待つてくれないもんね！」

再び笑顔を作り、手を握る。

「ほら！ポーっとしてないで、早く行こ？」

「あ、ああ。そうだな」

そう言つて、雄志は付いてくる。私は、この手を離さないように、強く、強く握り締めていた。

何故こんなことになったんだろうか？

幼馴染に手を引かれ、外に駆け出す。

「ちよ、ちよっと待ってっ！」

強く握られているので、振り払おうにもそうすることが出来ない。力づくで振り払うこともできるが、いくら幼馴染だといっても、女の子に乱暴するなんて、とてもできない。

「ん？なに？」

真美は笑顔で振り返る。でも、心からの笑顔にはどうしても見えな

い。

「あ、えーと・・・ホラ！行き先、決めてないじゃん？」

どうにか、尤もらしい言い訳に持っていった。

「あ、そういえば、そうだったね」

じゃ、どこ行く？と真美が切り出す。

「そうだな・・・とりあえず、ココアにでも行ってみるか」

ココアはこの辺りでは一番大きなデパートで、よくカップルなんか

を見かける。

真美は甘くておいしそうなおデザートだね。と言っていた。

「そっか。じゃあとりあえず行こ」

とりあえずを強調され、再び手を引かれる。

違う。そうじゃない。

俺が言いたかったのは、家を出る前のこと。

『私と一緒に居るの、ヤなの？』

どうして？なんで？そんなことを言ったのか。気になって仕方が無

い。

もしかしたら、傷つけてしまったのか？

全く心当たりが無い。

今も真美は俺の手を引いて歩いている。

決して振り返ることなく、歩を進める。

「ホント、どうしてこうなった」

声を最小限に抑えて、俺はつぶやいた。

午後七時三十二分。

デパートで時間を潰し、適当な店で夜食を済ませた俺たちは、真っ直ぐ家まで向かっていた。

「……………」

妙な沈黙が続く。デパートについて、時間がたつ度に、真美は少しずつ話さなくなっていた。

「気まずい、気まずすぎる。」

「あ、え」と、なんだ

さすがにこんな状況には耐えられないので、どうにか切り出す。

「公園、行くか。ガキン頃によく行ったところ」

「……………いいよ」

それだけだった。昼間はあるに元気だったのがウソのようだ。

それから、一言も話さず、公園に着いた。

「なんというか、変わってねえな」

滑り台、鉄棒、ブランコ、ジャングルジム。ありきたりな遊具が視界に入る。

どの遊具にも、所々錆が付いていて、なんだか寂しい気持ちになる。

「あの時は、あんなにキレイだったのになあ」

鉄棒を撫でるように触りながら、そんなことを言う。

しかし、感傷に浸る間もなく、真美はベンチに座る。

それを追うように、俺もベンチに座る。

「……………」

またしても沈黙。

「えーと、なんだろうな。こういうのってさ、ちょっといいよな。二人の思い出の場所ってカンジでさ」

自分でも何を言ってるのやらさっぱりだった。別に付き合ってるわけでもないのに、何恋人面しちゃってんだよ。と、今の俺に小一時間説教してやりたかった。

「……………」

今の真美も、きっとそう思っているに違いない。大体、俺から付き

合っていない宣言をしてしまっているのに、本当に俺は何を言っているんだろう。

「ユウジにとつてさ、私のことなんかよりも、寝ることの方が大事なんだよね」

いきなり真美がそう言った。

その言葉を聴いた瞬間、心の底から安堵した。

何気なく言った言葉だった。

だから、俺は

「なんだ、そんなことか」

真美の頭を撫でながら、そう言っただけ。

「え？」

真美は、可愛い目をまんまるにさせて驚く。

「そっか、無自覚とは言え、余計な心配させたな」

なんだか、とても嬉しかった。あんな何気ない言葉で、傷ついてしまっくらい、こんな俺なんかを想ってくれているのかと思うと、胸が温まる。

「最近、お前と一緒に遊んでなかったもんな」

「ごめんな。そう言いながら、優しく、頭をなでてやる。」

「ユ、ユウジの・・・ばかあ」

「私、ほんとに、不安になったんだよ？このまま、ドンドン離れちゃうかもって、本気で思ったんだから・・・」

真美の気持ちがあんなに伝わってない訳じゃなかった。むしろ、俺も同じ気持ちだ。

でも、まだ伝えるわけにはいかない。だって、そのままじゃあまりにも普通すぎるから。というより、いざとなると緊張してうまく言えないだろうから。

「まあ、なんだ。すこし、カラオケにでも行くか」

このまま家に帰ったんじゃ、三時間ちよつとが無駄になる。

「でも、もう晚いし、今更行っても・・・」

「今さらじゃないんだよ。今からでいいんだよ」

立ち上がり、少し伸びをしてから、真美に手を差し出す。

俺の中でも、何か吹っ切れた。こんな日常がつまらないとか、そんなことは無かった。なぜなら、俺にとってなにより大切な日常が、すぐそばにあったから。一緒に居るだけで幸せになれる相手がいるのに、それをいつしか見失っていた。

「ホラ、いくぞ！」

今度は俺が真美の手を引く。時々振り返りながら、真美が笑顔かどうかを確認しながら。

午後十一時。

「いや、久しぶりに歌ったなあ」

カラオケから家に帰り、玄関に入るなり、雄志は思いっきり伸びをする。

「うん、やっぱり思いっきり歌うと、気持ちいいね！」

それに合わせるように、真美も伸びをする。

「ま、先に風呂入ってこいよ」

リビングに入り、冷蔵庫に入っていたコーラを取り出しながら彼が言う。

「じゃあ、一緒に入る？」

「却下」

「え〜！？そこはもうちょっと恥ずかしがるところじゃないの!？」

「どうでもいいから早く入ってきなさい」

雄志は手で早く行けとサインをする。

それに彼女はばつの悪そうな顔をして、風呂場に向かう。

「……つぶはあ！」

コーラを一気に飲み干し、グラスを台所にシンクに置く。

「……はあ」

雄志はため息をついた。

「多分あれ、夢じゃないよな？」

昨夜のことを思い出す。浮かんでくるのは、とても綺麗な女の子。

なぜか緊張する。逃れられないことは分かっているがそれを必死に忘れようとしているときのような、そんな緊張感が彼を襲う。

暫く、考えていた。もし今日来たらどうするか、断るか、否か。

「普通に考えれば、断るよな」

しかし、納得がいかない。なぜあんなことになっていたのか。それだけが気になつて仕方が無かつた。

「あの子は、俺のことを知ってるよな素振りだったし・・・」  
何をどうすればあのようなになるのか、不可解極まりない。

「もしかしたら、現実には考えられないようなことが起こつてたり？」

とりあえずソファアに座り、テレビを点ける。

「ま、テレビでも見て落ち着こう」

それから、真美が風呂から上がるまで、彼はずっとテレビを見ていた。

午前二時。

「たしか、三十分ぐらいだったよな」

俺は静かに、その時が来るのを待っていた。

真美は風呂から上がるなりすぐに寝てしまったので、かなり暇だったが、此処まで来ると早いものだった気がする。

「でもまあ、どうすっかなあ？」

いまだに答えは出ていない。

「関わりとヤバそうではあるけどなあ」

かなり緊張する。たかが三十分が、いやに長く思える。

もしかしたら、命に関わるようなことかもしれない。もしかしたら、恋愛シミュレーションゲームの新ジャンルのようなことになるかもしれない。

「できれば、後者がいいな」

とりあえず三十分間、一人しりとりや腕立てをして過ごした。

二時三十分。携帯のディスプレイが時間を示す。

「そろそろ、か」  
なぜか落ち着いてくる。

静寂

静寂

静寂。

そして、それをインターフォンが破る。

「来たか・・・」

玄関に向かって歩こうとしたが、

「そっいや、また寝巻きだった」

一応風呂には入ったので、着ている服は当然のごとく寝巻きだった。

「ま、取りに行くのも面倒だし、イメージリアリティ使うか」

携帯のメニュー画面から、イメージリアリティを起動する。

適当な服を思い浮かべ、それを現実にする。

「これでよし」

再び玄関に向かって歩き出す。

玄関前に立ち、一度深呼吸をして、

「今夜も来るんだな」

そう言いながら、ドアを開けた。

## 第一章 はじまり その3 (前書き)

とりあえず、一章はこれでラストです。

その3から、だいぶペースは落ちてしまいましたが、二章以降はもつとおそくなると思います。

出来るだけ一週間に一話投稿を目指します。

## 第一章 はじまり その3

「こんばんわ。と言っても数時間で朝になっちゃうから、おはようの方がいいのかしら？」

目の前にいる美少女が、少しだけ迷った顔をする。

「ま、どうでもいいけど。アナタ、ユウジの方よね？」

言っていることの意味はよく分からないが、

「ああ、俺の名は勝道雄志、勝利の道を往き、真の男を志す者だ」と、人差し指を軽く立て、右手を挙げながら肯定する。

「そう、まあノコノコ出てきたんだから、着いてくるってことでいいのね？」

彼女の後ろには、漫画でしか見たことがないような、リムジンが一台停められていた。それを親指で指しながら、

「出来れば私に着いてきてもらいたいわ」

なぜかお願いしているようには見えないが、そう頼んできた。

「行ってもいいんだけどさ、その、一つだけ教えてほしいことがある」

「いいわよ？この私が何でも説明してあげる」

どんと来いと言わんばかりに胸を叩く。何かちょっと可愛い。

「え〜と、君はオシゴトって言ってたけど、もしかして危険なことだったりする？」

「もし、そうだと答えたら？」

「正直言つと、嫌だよ。でもさ・・・」

声が、震える。当然、足も。

昨夜は、どうにかなったけど、今夜はそうもいかないような気がしてならない。

根拠も、自身も無い。でも何か、ここでやらないといけないような、罪悪感にも似た感情が、今の俺を支配していた。

「俺、やるよ。多分、このままじゃいけないと思うからさ」

「協力してくれるのね？」

そう言つて、手を差し出す。

「役に立つかは分からないけどな」

その手を取る。とても暖かく、すごく心地がよかつた。

「なら、行くわよ。アナタの気が変わらないうちに」

そして俺と彼女は、リムジンに乗り込んだ。

止めておけばよかつたかもしれない。そうすれば、俺の日常は保障されていたのかもしれない。でも、今はこれでいい。？流れ？に任せて生きていただけの俺が、やっとまともに選んだ道なんだから。

午前二時三十五分。

「え？じゃあ俺つて今まで一年もこんなことやってたの？」

リムジンの中で、俺は衝撃の真実を知つた。

「そうよ、人格は違うけど、アナタの体を使わせてもらつてたわね」

「うわ、なんか怖え・・・」

それしか言葉が出てこなかつた。俺とは違う人格が、俺の体を使って深夜に好き放題やっていると想像したら、身の毛もよだつと言つものだ。

「あれ？じゃ、俺つてあのまま寝ててもよかつたんじゃ？」

「それはもう無理ね。アナタはもう覚醒したから」

「カクセイ？」

「そ、簡単に言つと仮人格はもう目覚めないようになつちやつたつてこと」

「じゃあ、それつて・・・」

俺がこれからずっとこんなことをするということの意味してるんじゃないかなろうか？

「何を今更・・・」

彼女は心底呆れたようにため息をつく。

「読心術！？」

「顔に書いてあるわよ、明らかに嫌そうな顔したもの」

「んなアホな」

「そんなことはどうでもいいけど、もうすぐ到着よ。アナタは初めてだろうから見てるだけでもいいわ。そんなに甘い相手でもないけど」

「そりゃありがたいな。いきなりやれなんて言われても、多分出来ないだろうし」

そして、リムジンが停まる。

「さて、行きましようか」

彼女はさっさと降りてしまう。

彼女の背を追うように、俺もリムジンから降りる。

「そういえば、君の名前聞いてなかったんだけど」

「あ、そういえばそうだったわね」

彼女はこちらに振り返り、

「私の名前はコトナ。で、主人格の方は天道琴葉っていうのと、コトナは胸に手を当てる。」

「これからアナタがお世話になるだろうから、よろしくね」

「お、お世話になります」

なにか納得いかないが、まあ事実だし仕方ないかな。

「そろそろね、いい？私の言うことには絶対に従いなさい。そうすれば死なないから」

「お、」

OKと言おうとした時、

ザ・ザザ・ザザザザザザザザザザザザザザ

ノイズが走る。とても小さな音だが、なぜか聞こえてくる。

「なんだ？この音」

「来たわ・・・神器を呼びなさい」

「ジンギ？」

「私達の武器よ。アナタのはカリバーンっていうの、名前を呼んであげるだけでいいから」

その後、コトナはスサノヲと呟いた。

そして、左手に白い巨大な何かが現れる。

真っ白で、六つに線分けされた、彼女の身長程ある刀身、そして、  
紅い眼でも付いているのかと思わせるような柄。それはどう見ても  
普通の武器ではない。

「何かすげえのな」

「さつさと呼びなさい！来るわよ！」

その瞬間、

ばああああああああああああああああああ！！！！！！

「！？」

轟音が鳴り響く。

「な、なんだよ！？」

疑問を持たずにいられない。

本能が、逃げろと催促する。

「私達の討つべき対象、ナイツよ」

そこにあつたのは、形を持った闇だった。形を見る限りは、四足獣  
といったところだが、どう考えてもこんな生物がいるわけがない。

「でかすぎんだろ！？」

おそらく全長五メートルはあるだろう。

「ボサツとしない！！早く呼びなさい！！！！」

コトナが怒鳴る。

一瞬驚いて、声も出なかったが、

「こ、来い！カリバーン」

目の前に、巨大な大剣が降ってくる。俺より少しだけ大きい大剣。  
真っ白な刀身には、刃が無く、一本の溝を中心に不規則に溝が広が  
っていた。

その刀身からは、もう一本柄が伸びている。使い難そうには見える  
が、二本目の柄は腕二本分はずれているので、持つ分には支障無さ  
そうだ。

そして、スサノヲにもあつたような眼は翠色で、どこか懐かしい感  
じがした。

「つてうわっ！地面に刺さってんじゃん  
ばああああああ！！」

そうしている内に、闇はすぐそこまで近づいていた。

「刺さってるんですけどお！？」

俺は自分でも何を言っているのかわからない悲鳴を上げた。

「足引つ張ってんじゃないわよ！」

コトナがスサノヲで闇を裂いた。形的には顔に当たる部位を捉えていた。

「おお、やったんじゃね？」

「さつさと抜きなさい！まだ終わってないわ！」

言われるがまま、指示に従う。

数センチほど刺さってしまったが、さほど力は要らなかった。

「これめっちゃくちゃ軽いな」

その大きさには似合わない重量感で、プラスチック製なんじゃないかと疑う。

「説明は後でするから！かわしなさい！」

闇は大きな前足を振りかぶり、俺たちを切り裂こうとしていた。

「うおお！？」

どうにかそれをかわす。

「こいつはエノクね。ただの雑魚よ。でも、やっぱりそんなに甘いやつじゃないわね」

コトナはあたりを見回す。

深夜で暗いのは当たり前だが、街灯が点いてないわけじゃない。だから、足元や、目の前には何があるのかが分かる、はず。

「暗すぎるんだよね？」

前を見ても、後ろを見ても、在るのは闇。普通なら、建物や電柱が見えるはずなのに、そこに在るのは闇だけだった。

「囲まれてるわね、十体くらいかしら？」

正直、もう帰りたい。俺もう絶対死ぬじゃん……

「大丈夫よ。もうすでに一体終わったから」

気付けば、先ほどまで目の前に居た闇は消えていた。また考えが読まれていた、でも、そんなことにいちいち突っ込んでいられない。「いい？私の言うことは、何があっても実行しなさい。じゃないと死ぬわよ」

死。それが怖い人間なんて、おそらく居ない。なぜなら、死は人間にとつて最大の抑圧だから。人間は死を減らすために技術を進化させている。

まさに、今の状況が、そうだ。こいつらに死を与えられるより先に、それを回避するだけの技術を身につける。それが、俺の生きるための選択。

「それはいいけど、無理難題は止めてくれよ？」

「大丈夫よ。まずは、カリバーンの眼を押しなさい」

「眼つて、これだよな？」

翠に光る眼のようなものを押す。

「キャスト・オフって言いながら、剣を振りなさい」

「え、えっと、キャスト・オフ！」

それにあわせて、剣を水平に振る。

『cast・off!』

神器から、男性の音が響く。

そして、刀身が、八つほどのパーツになり、飛散してゆく。

そこから出てきたのは、これまたシンプルな刀身で、半分に分けるように掘られている溝だけしか特徴がなかった。

「まさにキャスト・オフじゃん。サナギ状態のワームならこれでやれるんじゃない？」

その飛散したパーツが、五体のナイツに当たる。

それはやつらの体を貫き、やがて速度を失い、地面に落ちる。

「巧くやれたわね。さすがに全部つてわけじゃないけど、これで半分ほどに減ったわ」

体を貫かれたナイツたちは、黒い霧状になって消える。

「まじでやれちゃったよ・・・」

感激している間もなく、

「あと四体だから、気を抜かずに行くわよ！アナタは私の背中を守ってくれればいいから」

そう言つて、コトナは目の前に居たナイトに向かって走る。

「ちょ、それはさすがに無理難題だと思うけど!？」

他の三体は、コトナに向かって走り出している。

ばうぁおおおお!!

そのうちの一体が、コトナを目掛けてジャンプする。

「あ、危ない！」

走ろうにも、足が動かない。

足が震えている。正直、こんなやつらの相手するなんて、とてもじゃないが出来ない。今かばいに言っても確実に死ぬだろう。だから今は動けない。

『cast・off!』

そう聞こえて三秒と経たない内に、三体のナイトは消えていた。

「足引つ張るなって言っただでしょ？」

コトナは、いつの間にか二本の太刀を持っていた。右手に、先程持っていたスサノヲと同じデザインの刀身を持つ刀、左手にはスサノヲの眼から二本の刀身が真っ直ぐ伸びている刀。

「いや、さすがにあいつらの相手すんのは無理だって!」

「はぁ・・・まあいいわ」

ため息を漏らしながらも、残り一体になったナイトの攻撃をすべて避ける。

そして、俺の元まで一気に跳躍する。

「とりあえず、ナイトの倒し方を教えてあげるわ」

もうここまで来てしまうと、何が起こってもあまり驚かなくなってきた。

「よく聴いてなさいよ？一回しか説明しないから」

そう言っている間に、ナイトは俺たちに迫ってくる。

「ナイトは基本的に死なない。ただのエネルギーの集合体だからね」

ばうあ！

飛び上がった、コトナの首筋目掛けて前足を振るう。

「でも」

コトナがナイツを切りつける。

「私達がいっつらを倒せたのは、コアを壊したからなの」

コトナは右手で持っていた刀を地面に刺す。

そしてスサノヲの眼を押す。

「ストライク・クラッシュ」

『strike・crash!』

二つの刀身が、真つ紅な光を放つ。

コトナはスサノヲを振るう。

紅い粒子を撒き散らしながら、美しい軌跡を描き、目の前のナイツは消し飛んだ。

六号球ほどのバスケットボール大の赤い珠を残して。

「そして、これがコア。アナタがキャストオフしたときも、ちょうどこれを壊せたの」

「コア・・・こいつを壊せば、ナイツつてのは消えるんだな？」

「そうよ。今回はエノク相手だったから楽勝だったけど、他の上のランクだと、そう簡単にはいかないわ」

話しているうちに、コアに黒い霧が集まってきた。

「再生が始まつてるわね。コアは早く壊さないと一分もしないうちに復活するわ」

「だったら説明しないで壊してくれよ、怖えな」

コトナは、コアを軽く上に投げて、スサノヲで真つ二つにする。

綺麗に切れたはずなのに、粉々に砕け散る。

「こんなところね。また詳しい話は後でするわ。家まで送ったげるから、乗りなさい」

その直後に、コトナの真後ろにリムジンが停まった。

「もう、いろいろとすごいわ」

これで、俺の長い長い夜は終わりを告げた

## 第二章 おとうさん

午前三時五十分。リムジン内。

「足引つ張つてホントスミマセンしたっ！」

勝道 雄志は、頭を下げだした。

「そんなに謝らなくてもいいわよ。どうせこうなるだろうと思ってたし」

「そんな一言がとても痛いです・・・」

今度はうな垂れる。

「事実だし仕方ないでしょ。そんなことよりも、アナタに説明しなきゃいけないことがあるの」

そんな彼の行動は軽く流し、コトナが切り出す。

「す、スルーっすか」

それすらも無視し、彼女は続ける。

「アナタは今日、神になる権利を得たわ」

「は？」

唐突に、神なる権利がどうのこうの言われてもいまいちピンと来ない。

「カミつて、アレだよな？毛じゃないほうだよな？」

「毛じゃないほうつて・・・まあそうだけど、それは上のヒトたちに失礼でしょう？」

「だってそれ以外思い浮かばないし」

「はあ・・・」

全くこのバカは・・・とでも言わんばかりに、彼を見下す。

「まあいいわ。とにかく、権利を得た以上、アナタはこの先劇的な変化を味わうことになるわ。いわば、神に為るための試練って何かしら？」

「もつすでに、この状況が劇的なんですけど・・・」

「どうでもいいわよ、アナタごときの価値観なんて。ま、とにかく

覚悟はしといてねってこと」

「ひどいっす・・・コトナさんまじひどいっす」

しばらく立ち直れなかった彼だったが、

「そういえばさ、ナイツってのは、どこから来てんの？」

と、一つ疑問を浮かべる。

「別に来てなんかいないわ。ただ現れてるだけよ」

「ふーん、宇宙からの侵略とかじゃないんだな」

「ただのエネルギー体って言ったでしょ？」

あの時は彼なりに必死だったので、彼女の言っていたことは指示と、コアを壊せばあいつを倒せることしか覚えていない。

「エネルギーか・・・どこから来てんの？それって」

「簡単に言えば幻炉ね。アナタもイマジニアリティぐらい利用したことがあるでしょ？」

「まあ・・・そうだけど・・・」

彼は、どこか似たような話を耳にしたことがあったような気がした。幻路、巨大な武器、そして美少女・・・

「思い出した！これって都市伝説じゃん！」

先日見た掲示板のことを思い出す。

「？まあ、どうでもいいけど、その幻路からあまったエネルギーと、人のもつ最も強い思いを元に、ナイツは出来上がるの」

「ことごとく俺の言うことがどうでもいいことになってるけど・・・人のもつ最も強い思いって何ぞ？」

「そのまんまの意味よ。大抵は恐怖ね。トラウマなんかはナイツの元になりやすいわ」

恐怖、トラウマ。その言葉を聞いた瞬間、彼はあの出来事を思い出した。

もう、何年も前。何度忘れようとしても、それは決して忘れられない。

「へ、へえ・・・トラウマ、か・・・」

その時、

「ユウジ様。到着いたしました」

と、リムジンを運転していた白髪の五十台ほどの老人が言う。

「あ、ありがとうございます。わざわざ送ってもらって」

それに、老人は軽く会釈し、

「これも仕事ですので」

と返す。

「詳しいことを知りたかったら、ここに来て頂戴」

携帯に地図情報を保存させる。

「わかった。昼ごろに行ってみるよ。じゃ、また」

そっぴいながら、彼はリムジンを降りる。

「今日は疲れたな・・・」

俺は、一度疲れをリフレッシュするため、伸びをした。

これになかなかすつきりして気持ちいい。

「・・・ただいま」

声を潜めながら、家に帰りを告げる。たぶん、親に内緒で遊びに言

って帰ってきたときは、こんな感じなんだろう。

でも、それを怒ってくれるような親は、もう居ない。

「何考えちゃってんだか・・・眠いし、もう寝よう」

携帯を開き、イマジニアリティを解除する。すると、服が二時間

ほど前の、寝巻きに戻る。

「二百五十円か・・・」

料金だけ確認して、リビングのソファに横になる。

現在四時三十分。おそらく誰もが寝ている時間帯。

「最も強い思い、？恐怖？か」

それだけ言っ、目を閉じる・・・

・・・過去。それは人の思い出と、文献によって構成される。過

去の人が未来に伝えようと、いろいろな手段で過去を残す。

俺にも、過去というものがある。誰だってそうだから、俺だけ特別

なんてことはないんだけど、少しだけ、みんなと違う過去を、俺は

持っている。

あれは今から十年ほど前。

「おとーさん、おかーさん」

僕は、リョーシンを呼ぶ。リョーシンは、お父さんと、お母さん二人のことをいうらしい。

深夜、目が覚めてしまったてなかな眠れなかったのを、今でも覚えてる。

だから、僕はお父さんと、お母さんが寝ている部屋に向かったんだ。僕は二階で寝ていたから、一階まで降りて、リビングを歩いてリョーシンの

寝ている部屋に向かう。

できるだけ、音を立てないように、ゆっくり、ゆっくり戸を開けた。キイという少しだけ嫌な音を立てながら、ドアが開く。

「おとーさん、おかーさん」

僕は、またリョーシンを呼ぶ。

「どうした？眠れないのか？」

するとお父さんが目を覚まして、手招きしてくれた。

とても、幸せだった。家族三人で、いつも一緒に居た。それだけで十分だった。

「うん・・・」

もう六つになるから、少し恥ずかしいけど、まっくらの中に一人で居るよりは、リョーシンのぬくもりを感じながら寝るほうがいい。僕はお父さんの方へ行く。

「まったく、仕方ない子だなあ。ユウジは」

お父さんは、僕の頭を撫でてから、僕をだっこして、ベッドの真ん中に置く。

こういうジョウタイのことを、カワノジっていうらしい。

「大丈夫。ユウジは、お父さんと、お母さんが絶対守ってやるからお父さんは、僕が寝るまで、ずっと起きててくれた。

ずっと、こんな日常が続くと思っていた。俺が立派な大人になる

まで、父さんも、母さんも、ずっと俺を支えてくれるものだと思っていた。それが、あんなことになるなんて……  
このころの僕は想像さえしていなかった。

また、眠れない夜がやってきた。

雨がザアザア音を立てながら、家の屋根に降り注ぐ。遠くの方でゴロゴロ……と音が聞こえるから、たぶん雷雲なんだろう。

眠れない夜、こんなときは、リョーシンとカワノジで寝るのが一番いいと思う。

なんだか、怖いから。守ってくれるリョーシンがいないと、不安で仕方がないから。

「おとーさん、おかーさん」

そう言いながら、ドアを開ける。

階段を下りて、リビングを通る。

そして、ドアノブを握って、回す。

キィィ……あいかわらず、いい気分になる音じゃない。

「おとーさ……」

言葉が出なかった。一瞬、いや、十数秒ほどは夢だと思っていた。

お父さんが……お母さんを、壊していた。

「なんで？」

ギモンを持たずにはいられない。

どうして、父さんが母さんを殺すのか？そのことだけを考えていたと思う。肉を裂かれ、ただの肉片と化した、いままでお母さんと呼んでいたモノ。

それだけを見つめて、

「やめてよ……おとーさん」

お父さんは、止まらない。まるで何かに操られているように、目を紅く、紅く光らせながら、お母さんを壊していく。

一瞬、部屋の中が明るくなる。雷が鳴る。

「……壊したい。ナニモカモ、全部、コワシタイ」

お父さんが、こっちを向く。不気味に笑いながら、コワス、コワス。とだけ言っている。

「足りない、マダダ、まだ足りない。コワシタリナイ」

お父さんは、音も立てずに立ち上がる。

そのまま、一歩ずつ、ゆっくりと歩いてくる。

「お、おとーさん・・・？」

一歩、近づく。

とても小さな音ではあるが、聞こえる。確かに聞こえる。死へと近づく音が。

一歩。

一歩。

一歩。

一歩。

一歩、近づく。

「コワスコワスコワスコワスコワスコワスコワ」

生きている心地と言うものは、わかっていなかったけど、正にこの時は、生きた心地という物がしなかった。

声が出ない。大きな声を出さなきゃ死んじゃうのに、どうしても出ない。

お父さんが、ゆっくりと右手を上げる。その手には、大きなナイフが握られていた。

死。

紅い目を光らせ、壊すことしか考えてないような目で、僕を睨む。

そして、

部屋が一瞬明るくなる。とても大きな音がしたから、また雷が落ちたんだ。

もう、どうでもいい。

目を瞑って、あきらめていたのに。

俺は、死ななかつた。雷が落ちた後、どういうわけか、父さんは姿を消していた。

## 第二章 おとじさん（後書き）

次のお話は、九月十三日から十八日を予定しています

## 第二章 おとうさん その2

無限世界。

「まだ完全にはシフトできてないみたいだよ?」

何もない世界に、少年の声が響く。

「過去ノ干渉ヲ確認。まだ第一段階ト予測シマス」

今度は女性の声。

「まあ、まだ始まったばかりだからな。ソウシの予測では、もうすぐ動き出すらしい」

そして、野太い男性の声が響き渡る。

「でもさあ、ほんとに起きるのかなあ? 聖戦なんてさ」

「どういう事デスか?」

「この世界の管理者であるはずの僕たちが観測できないんだよ? この状態でもし聖戦が起こるなら、この世界ごとシフトしてることになるよね?」

その声は、どこか不安を感じさせた。

「その先には、何があるんだろうっね?」

それきり、声は響かなくなった。

「.....」

ゆっくりと、目を開ける。

「そりゃまあ、夢だよな」

体を起こし、壁に掛けてある時計を見る。

現在、五時二十四分。

凄く長い夢を見ていた気がするのに、まだ一時間ほどしか経っていない。

「父さん・・・母さん・・・」

後ろを振り返る。

俺が座っているソファのメートルほど後ろには、テーブルがあり、

そのまた後ろ、約三メートルに、ドアがある。

そのドアの向こうが、さつき夢に出てきた部屋。この家に帰ってから数年間、一度も開けたことが無い。所謂、開かずの間。

「うんっしょっ」と

ソファから立ち上がり、そのドアを目指す。まあ、数秒でたどり着いてしまうけど。

大きく息を吸い、

吐き出す。

ドアに手をかける。

「・・・入るよ」

誰が居るわけでもないのに。俺は何を言っているんだろうか。

きい

少し劣化しているのか、音は低くなっている気がした。

変わらないところと言えば、聞いていて気分がいいものではないところ。

部屋の中は、何も変わっていないかった。二人が寝るためのダブルベッド、小さな机と小さなライト。味気の無い部屋。

「父さん、母さん」

十年前のあの光景なんて、まるでウソだったかのように、何も変わっていない。

それでも、あの事実は変わらない。俺の頭にしっかりと刻み込まれたあの記憶は、おそらくどうやっても取り消せない。

できれば綺麗さっぱり忘れたい記憶なんだが、それと同時になぜか忘れたくない気持ち、俺にはあった。だって、この記憶を忘れてしまえば、父さんと母さんの事を全部、忘れてしまっただから。

今では、そう思っている。

「うう・・・」

少し気分が悪くなってきた。あの事を思い出すと、いつもこんな風に気分が悪くなって、吐きそうになる。

今日は、全然寝てないというのもあるので、一段と気分が悪い。

だから俺は、トイレに駆け込んで、胃の中のものを全部吐き出した。

トイレから出て、口を洗面台でゆすいでから、リビングに戻る。ソファに腰掛け、テレビをつけてみる。もう五時半を過ぎてしまっている。大したもののは放送していなかったが、随分落ち着く事が出来た。

「ふわあ〜・・・」

間の抜けた感じのあくびが出る。落ち着いたらまた眠くなってきた。テレビを消して、ソファに横になる。すぐに、意識は消えた。

「ん〜！よく寝た」

月森 真美は体を起こす。窓のカーテンを開け、一日の始まりを確認する。

「今日もいい天気！きつといい日になる！」

体を思いっきり伸ばして、一日の始まりを体感する。これが彼女の一日の始まりにする行動で、曰く、これをしないと一日元気に頑張れない。らしい。

「そういえば、ここで寝るのは、何年ぶりになるのかな？」  
今乗っているベッドを、軽く撫でる。

「ユウジのお母さんたちが居るときは、よく来てたのに・・・」

彼女は幼馴染の顔を思い浮かべる。昔は凄く臆病で、女の子の私より怖がりだったなあ。なんて思う。

「今じゃ、全然違う子みたいになっちゃたな」

いつも一緒なのに、とても寂しい気持ちに駆られる。心に大きな穴が開いた気分がした。

「ま、大丈夫だよ。ユウジはユウジだもん」

そうは言ってみるものの、不安で仕方がない。

本当は、昔の彼に戻ってほしい。臆病だからこそ、人のことを心から愛したり、優しくしたりできる、昔の雄志に。

「やっぱり、仕方ないこと、なのかなあ？」  
真美は、窓から太陽をのぞいてみる。太陽は、みんなを平等に照らしていないのと同様に、この世界も、みんなが平等にはならないななどと、彼女は思った。

「そういえば、ユウジはどこで寝たんだろ？」

気になって仕方がなくなってきた。もしかしたら、迷惑をかけちゃったんじゃないか？なんて思えてきた。

「とりあえず、下に行かないと」

ベッドから降りて、部屋を出る。そして、階段を下りて、リビンググに出る。

「ユウジ・・・？」

雄志は、リビンググのソファで寝ていた。そんなに大きいソファじゃないから、足がはみ出ていたり、落ちそうなくらい狭そうなのが、とても寝苦しそうだった。

「ちょっとだけ、迷惑かけちゃったかな？」

でも、少し寝苦しそうに寝ている雄志が、昔の雄志と似ていた。

「ちっちゃいころも、よくあんな顔してたな」

なんだか懐かしくなってきた。昔の思い出が、全部蘇ってくるような気がした。

雄志の体を少し起こして、

「ユウジ、軽すぎじゃない？」

なんて言いながら、作ったスペースに腰掛ける。雄志の頭をゆっくり下げて、太ももに乗せる。

すると、雄志の顔が少しだけ緩やかになった。

それが、とても愛おしく、キスぐらいしても大丈夫なんじゃないかな？なんて思ってしまう。でも、体勢的にキツイ部分があるから、それはやめておく。

「なんだか、恋人同士みたい」

頭を撫でながら、そんなことを言う。まだ雄志は「恋人とかそーい

うのは早い」なんて言ってるけど、もう十六歳同士なんだから、付き合うぐらいは普通だとおもうけど・・・

「でも、今のままでも、いいかな？」

恋は、この時期が一番楽しいんじゃないかな？だって、ゲームやアニメも、ゴールしたらそこで終わっちゃうもん。だったら、暫くはこういうドギマギした感じのほうが、？らしい？んじゃないかな？なんて、思ってしまう。

「でも、心変わりしないうちに、応えてね」

返事はない。もうすっかり気持ちよさそうに寝ている。

今は、これを見れるだけで十分だった。

## 第二章 おとうさん その2（後書き）

そろそろ物語りも動き始める頃です。正直に言うと、これからどうなるかは全く分かりません。もちろん、エンディング等の重要なところは考えているのですが、それまでの過程は白紙だったりします。これから勝道くんは何を見て、どう選択するのか、読んでくださる方は、何卒応援、よろしくお願いします。

次回の更新は、来週の夕方ごろになると思います。（変更する可能性大）

## 第二章 おとうさん その3

午前十一時二十八分。

俺は、真美に膝枕をしてもらっていた。

「え？おかしい。お前それはおかしい」

そして俺もすこしおかしい。

「なんで真美に膝枕されてるわけ？」

「えっと・・・なんでだろ？」

真美が分からなかったら、一体誰がこの状況を理解するのか。突っ込みたい状況ではあったが、とりあえず体を起こす。

「はあく、無駄にしんどい・・・」

ソファから立ち上がり、伸びをする。相変わらず気持ちが良い。

「ユウジ、まさか夜更かししてた？」

「ま、まあ、そんなとこかな？」

その上金髪美少女と一緒に黒い巨大なやつらとバトルしてました。なんて言えるわけが無い。

「そんなことよりさ、俺昼から用事あるから、昼飯食ったら帰れよ」

「え〜？あたし聞いてない」

「だって言ってなかったし」

ひどい！など言っている真美を尻目に、昼食の用意をする。

「カップ麺でもいい？」

「よくないに決まってるでしょ？どうせなら一緒に何かつくろ？」

そう言つて、冷蔵庫を開ける。

「今作れるのは、オムライスぐらいじゃね？ほとんどスツカラカンだろ？」

「ほんとだ・・・ユウジちゃんと食べてるの？」

「一応な」

「だめだよ？ちゃんと食べないと。なんなら、私が毎日作りに行つてあげようか？」

卵を持ちながら、俺の隣に寄ってくる。

「それもいいかもな」

まんざらでもなかったもので、肯定しておく。

「ホントに!?! やった! えへへ・・・なんかこうしていると、夫婦みたいだね」

それに、俺は、静かに頷く。

昨夜のことが、信じられないくらい普通の一日。神になる権利がどうこう言っていたあの出来事が、かなり懐かしく感じる。

「真美と居ると、つくづく平和でいいな」

なんてことを言っつて、料理の手を進める。

「ふいい〜」

オムライスを間食し、満腹感に満たされる。

「あ、あのさ。さっきのつて、ホントなの?」

真美が不安そうに尋ねる。

さっきのとはおそらく昼からの用事の件だろう。

「まあ、ホントかな」

「今日じゃなきゃ、ダメなの?」

「結構・・・というかなかなり重要な用事だからさ。出来ればはずしたくないんだよ」

約八時間ほど前にした約束だけど、俺のこれからに関わる事なので、出来る事なら早く知りたい。

「そっか・・・じゃ、仕方ないか、な?」

この二日間で、真美の落ち込む姿をよく見るようになっている気がする。まあ、ほとんど俺の所為なんだろうけど。

「そんなに落ち込むなよ。多分すぐ終わるし、明日も休みなんだから、夜に来てくれれば良いさ」

「いいの?」

「いいもなにも、そんなにでかい鞆で用意されてちゃ、断るにも断れんわ。どんだけ気合入れてんだと」

と、リビングに置きっぱなしだった真美の鞆を指す。

「う・・・だって、久しぶりにユウジの家に泊まるんだもん。あれもいるこれもあるってなっちゃおうよ」

恥ずかしかつたのか、真美は顔を赤らめる。そんな仕草に、俺は少しドキッとしてしまう。

だから、俺は時計を見る。現在、十二時三十分。

「さ、さて。そろそろ行くかね。鞆は重いだろうから置いていても良いけど、服とかは洗濯するような奴は出来るだけ持って帰れよ」

真美はそれに「はい」なんて、返事を返す。それを聞いてから、二階にある自室に向かう。

「随分、久しぶりに帰ってきた感じがするな」

昨日、というか今日で色々ありすぎて、マイルームがとても懐しく思えた。

「とりあえず、着替えなきゃだな」

「ちょっとだけ、寂しいかも・・・」

せっかくお泊りに来たのに、いきなりお開きだなんて。

「まあ、夜からまた来ても良いって言うてたし、少しだけガマンしてあげようかな？」

そうは言っても、どこか不安だった。このまま、ユウジを放っておいたら、どこか遠くへ行ってしまいそうな気がした。

とても、とても愛おしい人。いつまでも、大切にしたい人。どんなときでも、想ってもらいたい人。それが、雄志なんだ。

たぶん、向こうもそう思ってくれている。はず。

「自分で考えるのも恥ずかしいけどね」

自分の頭をコツン、と叩く。不安になっちゃダメ。と自分に言い聞かせる。

「大丈夫、だれよりも臆病で、誰よりも普通を望んでるユウジだもん。変な事には巻き込まれてないよ」

どう考えても、このタイミングで用事があるのはおかしい。昨日私  
が寝た後に何かあったに違いない。  
でも、信じてるから。大丈夫だって。

「おい、そろそろ出るから、さっさと用意しろよ」  
廊下のほうから声が聞こえる。

「うん！今から出るよ！」  
それに、大きな声で応える。

「じゃ、家に帰って少し休んだら、メールするから」  
家の鍵を閉めて、真美に言う。

「うん。出来るだけ、早く済ませてね」  
自分でも、いつ終わるか分からないけど、出来るだけ不安にさせたくないので、

「尽力します」  
と応える。

「じゃ、また今夜」  
真美は、小さく手を振る。

「ああ、また今夜」  
それに俺はサムズアップで応える。  
それで、真美は振り返り、自分の家に向かう。となりだから、すぐに着いてしまうけど。

真美は家の門の前で、もう一度俺に向かって手を振る。そして、そのまま家の中へと入っていく。

「さて、とりあえず、行ってみるか」  
携帯を開く。

現在午後十二時四十五分。

「地図から視るに、そんなに遠くは無さそうだな」  
大体、歩いて十五分ほどの距離だろう。

俺は、地図を頼りに、指定された場所に向かった。

## 第二章 おとうさん その3 (後書き)

今週はすこし遅れてしまいましたのが、もしかしたら来週も投稿できな<sup>い</sup>恐れがあります。

とりあえず、逃走はしていませんので、呼んでくださっている方は、ご安心ください。

一応、次回は来週の土曜日を予定しています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0497w/>

---

Knight of Night 聖なる騎士の物語

2011年10月2日19時31分発行